

仲道郁代

ピアノ・リサイタル

劇場の世界

The
Ikuyo
Nakamichi
Road
to
2027

PROGRAM

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第19番 ト短調 Op.49-1

Beethoven: Piano Sonata No.19 in G Minor Op.49-1

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第20番 ト長調 Op.49-2

Beethoven: Piano Sonata No.20 in G Major Op.49-2

この公演では第19番、第20番のソナタを組み合わせて1曲と捉え、下記の順で演奏いたします。

第20番 第1楽章 Allegro ma non troppo

第19番 第1楽章 Andante

第20番 第2楽章 Tempo di Menuetto

第19番 第2楽章 Rondo, Allegro

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第18番 変ホ長調 Op.31-3

Beethoven: Piano Sonata No. 18 in E-flat Major Op. 31-3

第1楽章 Allegro

第2楽章 Scherzo, Allegretto vivace

第3楽章 Menuetto, Moderato e grazioso

第4楽章 Presto con fuoco

シューマン パピヨン Op.2

Schumann: Papillons Op. 2

序奏 Introduzione: Moderato

第1番

第2番 Prestissimo

第3番

第4番 Presto

第5番

第6番

第7番 Semplice

第8番

第9番 Prestissimo

第10番 Vivo

第11番

第12番 Finale

※後半では字幕掲示板を使用いたします。

シューマン 謝肉祭 Op.9

Schumann: Carnaval Op.9

前口上 Préambule

ピエロ Pierrot

アルルカン Arlequin

高貴なワルツ Valse noble

オイゼビウス Eusebius

フロレスタン Florestan

コケット Coquette

返事 Réplique

(スフィンクス Sphinxes)

蝶々 Papillons

A.S.C.H.-S.C.H.A ~踊る文字
Lettres dansantes

キアリーナ Chiarina

ショパン Chopin

エストレラ Estrella

再会 Reconnaissance

パンタロンとコロンビーヌ
Pantalon et Colombine

ドイツ風ワルツ (間奏曲 パガニーニ)
Valse allemande (INTERMEZZO Paganini)

告白 Aveu

プロムナード Promenade

休息 Pause

ペリシテ人と闘うダヴィッド同盟の行進
Marche des "Davidsbündler" contre les Philistins

使用楽器：ヤマハコンサートグランドピアノ CFX

仲道郁代プログラムを語る

劇場の世界

ヒューマニズムと人間への希望



The Road to 2027の「春のシリーズ」は、ベートーヴェンのソナタを核に、そのソナタの持つ意味やあり方をテーマとし、ポスト／プレ・ベートーヴェンの作品を組み合わせてプログラミングをしているシリーズです。

今回のテーマは「劇場の世界」と銘打ちました。プログラムの中心となるベートーヴェンのソナタは、第18番です。ベートーヴェン研究家で、私自身若い頃に大きな教えをいただいた故・諸井誠先生は、このソナタについて「コメディア・デラルテ^{*}」との関連を指摘されていました。コメディア・デラルテの世界では仮面をつけたさまざまなキャラクターが登場します。ピエロ、アルルカン、パンタロン、コロンビーヌ、夢見る人、シャイな人、元気な人、さまざまなキャラクターが次々と出てくる喜劇です。

私は作品に取り組むときに、その作品の主語は何かを考えます。ベートーヴェンのソナタであればもちろん主語はベートーヴェン自身で、「何々

はこうである、故にこのようである、すなわちこうだ」と論説のように語っていく作品もありますし、「私」という主語が変容して「我々」へと変わっていく作品もあります。ですがこの第18番のソナタには「我、こう思う」ということではない、「私」という存在を含めたさまざまを、俯瞰して見ているような視線が感じられます。斜め上から見て「お前はこうじゃないか」、「世の中はこうじゃないか」と語っている、そんな作品だと思うのです。今回のテーマ「劇場の世界」というのはここから来ています。つまり、作品の中にさまざまなキャラクターが登場して、それぞれに何かを語ってゆく。他者の目線でもって、自分や世の中、多様な人々の有様や自分の中の多面性をも発見していく、そのような視点があるということです。その根底に流れるのは何か。それは人間を信じるというヒューマニズムだと思うのです。「劇場の世界」とはすなわち、ヒューマニズムの世界を描くプログラムです。

^{*}コメディア・デラルテ

16世紀にイタリアで栄えた喜劇。即興演技と仮面の使用を特徴とする。歌や踊り、パントマイム、道化の演技、風刺などが織り込まれ、おさまりの仮面と衣装を着けた典型的な役柄が登場する。



コメディア・デラルテの上演風景。野外劇場は多くの見物客で賑わう。
M. Marcola "Una commedia italiana a Verona" (1772)

ベートーヴェン

ピアノ・ソナタ第18番 Op.31-3

では、その観点をもとにそれぞれの作品を見ていきたいと思います。まずはこのコンサートの核となる第18番のソナタです。興味深いのは作曲された年です。この曲は1801年～1802年に書かれましたが、1802年というのはハイリゲンシュタットの遺書が書かれた年でもあります。この曲と同じ作品番号が与えられている第17番《テンペスト》Op.31-2は、ハイリゲンシュタットの遺書で書かれたように、死のうと思いつめたベートーヴェンが神（天）からの啓示を受け、自分には音楽家としての使命があるから生きていかなければならないと決意するに至る経緯が、シェイクスピアの『テンペスト』の主人公であるプロスペローになぞらえて描かれていると私は考えています。ここには神（天）という存在があります。しかし、今回の第18番の中には、神のような存在は登場しないと私は思っています。あくまで人間の、自分の有様を、「こんなも

のさ、人生は」というように斜め上から見ていくかのような視点があるように思うのです。

第1楽章は、冒頭の音型が「なんだろう？」と言っているようなクエスチョンの形で始まります。ベートーヴェンのソナタにはクエスチョンの形はよく出てきます。例えば初期の第3番のソナタもクエスチョンで始まります。しかしこのクエスチョンの質は、言うなればすでに答えがわかっているあえて問いを発しているようなもの。「ほら、どうだい？ おもしろいだろう？」というような自信のあるクエスチョンの提示の仕方です。一方、中期のソナタで、例えば第21番《ワルトシュタイン》の第2楽章などでは、神（天）に問うているようなクエスチョンとなっています。ここでは彼は自分の運命を神（天）へ問いかけています。このような神（天）への問いかけは、後期でも、最後の第32番のソナタ

に至るまで、さまざまな形で出てきます。けれども第18番のソナタでのクエスションは、これらのいずれのクエスションとも異なります。神(天)に答えを求めるのではなく、「なんだろう？なんだろう？ なんなのさ一体！」というように、自分を上から見て、その状態を笑うかのような、そんなクエスションの提示の仕方なのです。そしてその問いかけを、「なんちゃって」と受け流してしまふ。自分が主語となって何かに問うているのではなく、他者の視線で自分を見て鼻で笑う、あるいは笑っている別の者がそこにいるというような、アイロニカルな見方を感じます。

第2楽章はとても動的です。追いかけてこをするような雰囲気です。後述のシューマンの《謝肉祭》に〈パンタロンとコロンビーヌ〉という曲がありますが（いずれもコメディア・デラルテのキャラクター）、2人が言い合ったりけんかをしたりするようなその様は、この第2楽章のスケルツォと似た趣きがあります。

第3楽章のメヌエットは、諸井先生はまさに舞台上のピエロを見るようだとおっしゃっていました。弾いていると私もそのように感じます。道化として人を笑わせるピエロ、その仮面の下、化粧の下にはある種の諦観を抱えている、そんなピエロの様子ようです。曲の最後は、あたかも舞台上のピエロに当たった照明がだんだんと小さくなって行って、最後ふっと消えてしまうかのような終わり方です。哀しみを抱えたピエロは消えゆくのみなのさ、と自分をピエロに重ねて笑い飛ばしているようでもあります。

第4楽章は、ベートーヴェンにしては珍しいコミカルさです。ある種捨て鉢とでもいうような印象を受けます。「私はこう考えるのだ」というような論理ではなく、さまざまな見方で人生を見てきた最後、「まあ、人生こんなもんさ」と言っているかのようなようです。ハイリゲンシュタットの遺書を書いたベートーヴェンは、第17番《テンペスト》では神(天)からの啓示を受けて切々と語りました。しかし第18番においては、そういった自分を俯瞰して見ている、投げやりな雰囲気なので

す。けれどもこの投げやり感には、暗さがありません。人生こんなもんさ、といいながら、それでも進んでいくのだ、という明るいエネルギーが、この作品からは感じられると思います。

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第19番 Op.49-1、第20番 Op.49-2

今回最初に演奏するのは第19番と第20番のソナタです。どちらも2楽章形式で、お子さんの発表会などでも弾かれるようなかわいらしい曲です。第19番、第20番という番号をもらってベートーヴェンのソナタの並びに入ってはいますが、実際書かれたのは1795年、98年で、第3番と第4番のソナタの間の時期でした。初期の第1番〜第4番のソナタは全て4楽章形式で、演奏時間も長く、革新的かつ巨大なものたちですが、同時期に書かれたこのような小さな2楽章のソナタがなぜ第18番のソナタあと、そして第21番の《ワルトシュタイン》の前に置かれているのか、私にとっては大きな謎です。

けれど2曲の楽章を見てみると、全て「ト」の調性で書かれています。そして、モチーフを調べてみると、全て同じモチーフで作られています。もしかしたら、最初のアイデアとしては4楽章の作品として書こうと考えていたものが、2曲として出版されてしまったものではないか。そのような想像から、「劇場の世界」というテーマのもとで、2曲を組み合わせで1曲にして演奏したいと考えています。

つまりこのような形です。

第20番 第1楽章 Allegro ma non troppo ト長調

第19番 第1楽章 Andante ト短調

第20番 第2楽章 Tempo di Menuetto ト長調

第19番 第2楽章 Rondo, Allegro ト長調

組み合わせると、Allegro, Andante, Menuetto, Rondoという構成となります。作品の持つドラマ性から一つのストーリーを作るという意味において、今回はこの形で演奏したいと考えています。

シューマン

パピヨン Op.2

後半の1曲目は《パピヨン》Op. 2です。この曲の出だしは、まさにあたかも蝶がサナギから羽化する瞬間のような始まりかたです。そして《謝肉祭》の〈フロレスタン〉の中にちらりと出てくるテーマが続きます。

《パピヨン》はジャン・パウルの『生意気盛り』という小説がもとになっています。『生意気盛り』の中には、ヴァルトとヴルトという対照的な性格の2人の主人公が登場しますが、これがまさにシューマンの創り出した、内気で夢見がちなおイゼビウスと、動的なフロレスタンという二面性を表すキャラクターのモデルとなった登場人物

<p>●シューマン《パピヨン》とジャン・パウル『生意気盛り』第63章との関連</p> <p>シューマンは、私蔵していた『生意気盛り』の中に、《パピヨン》の第1曲〜第10曲と関連するものとして、番号を記入していた。――以降はシューマンが書き入れた部分の引用。訳は中島卓郎氏による。</p>	
<p>序奏</p> <p>第1曲：仮面の踊り</p> <p>ヴァルトは仮面舞踏会に出かける。――そして彼（ヴァルト）は小部屋を出ながら神に再び幸運をもたらしてくれるように祈った。自分がまるで初めての戦いに出陣する、栄光を渴望している英雄のように思えた。</p>	<p>の水平に進む踊りで、時には急勾配を上げるような鉱夫の踊りでホール中を駆けていたね。</p>
<p>第2曲：ヴァルト</p> <p>――ようやく彼（ヴァルト）は人々が渦巻き、音が鳴り響き、燃えるような、魔法の煙の中で沸き立つ人々と帽子で一杯の、隣の部屋にたどりついた。空は北極光に満ち、お互いにジグザグに動きまわる人々で溢れている！</p>	
<p>第3曲：ヴルト</p> <p>――なによりも彼（ヴァルト）をひきつけ驚嘆させたのは、人がすっぽりと入った、辺りを動きまわる巨大な長靴であった。</p>	
<p>第4曲：仮面</p> <p>――仮面を付けた羊飼いの女が現れ、次いで半仮面を付け、ほのかに香る桜草の花束を持った質素な修道女が現れた。</p>	
<p>第5曲：ヴィーナ</p> <p>ヴァルトはポーランドの乙女ヴィーナと出会う。――今、彼（ヴァルト）は静かな乙女（ヴィーナ）の横でほんの短い間二人きりになっていた。（中略）花の蕾が葉蔭からのぞくように、ヴィーナの半仮面から半ばバラのような半ば百合のような顔がのぞく様は、彼にとって新たな魅力を感じさせた。</p>	
<p>第6曲：ヴルトの踊り</p> <p>踊りの上手なヴルトが、ヴァルトの滑稽な踊りについて語る。――君（ヴァルト）のワルツときたら今まで…気を悪くしないでくれ…まあ結構な身振り手振りです時には御者</p>	
<p>第7曲：仮面の交換</p> <p>ヴィーナが二人の青年のどちらを愛しているかを確認するため、ヴルトはヴァルトに仮面の交換を提案する。――彼（ヴルト）は仮面を投げ捨てた。（中略）「その衣装を脱いでくれ。それがお願いの半分だ。そしてこれを着て“希望”（ヴルトの仮面舞踏会での役）になってくれ。僕は“御者”（ヴァルトの役）の格好をするから。これがお願いのすべてだ。」</p>	
<p>第8曲：告白</p> <p>ヴァルトに扮したヴルトは、ヴィーナに愛を告白する。――まるで蝶の羽や桜草の花粉をなでるように彼（ヴァルト）はヴィーナの背中にそっと触れた。</p>	
<p>第9曲：怒り</p> <p>仮面の交換を頼むヴルトの言葉（第7曲の箇所）の後のヴァルトの返事。――「おおヴルト」ヴァルトは驚いて答え、（中略）「そんなことは勿論『喜んで』と答えるまでさ。」「じゃ、早くしてくれ」ヴルトはお礼も言わずに答えた。</p>	
<p>第10曲：仮面を脱ぐ</p> <p>ヴァルトになりすましたヴルトがヴィーナと踊る。――ヴルトはすばやく手を伸ばしたり交差したり、飛ぶようにあちこち導いたりしながら少しずつポーランド語をもらし始めた。遙かな島から海上にとばされた蝶のような、ほんのかすかな言葉の吐息はヴィーナの耳には真夏の夜に鳴くひばりの歌声のように響き、半仮面の奥で歓喜の炎が燃え上がった。</p>	
<p>第11曲：急ぎ立ち去る</p>	
<p>第12曲：終景と去りゆく弟</p>	

謝肉祭 Op.9

最後に演奏するのは、シューマンの《謝肉祭》です。謝肉祭というのは今ではキリスト教と結びついています。もともとはそうではなかったと聞きました。さまざまな登場人物が寸劇をして、次々と現れていくものだったそうです。謝肉祭劇というのは笑劇、おもしろい劇なのです。曲は〈前口上〉で始まります。もうまさに劇の世界です。「さあさあ始まりますよ」というところから、最初に登場するキャラクターが〈ピエロ〉です。その次に〈アルルカン〉という忙しい動きをするキャラクターがでてきます。このピエロとアルルカンというのは、まさにコメディア・デラルテの主要キャラクターです。



「アルルカン」

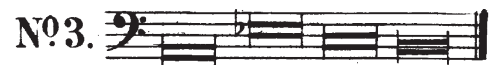
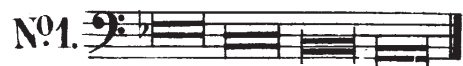
物語を引っ掻き回すトリックスターとして登場する。道化師、ペテン師だが人気者。

シューマン《謝肉祭》の中にもコメディア・デラルテという考えが入っているのがわかります。そして〈高貴なワルツ〉が出てきます。これは、後半の〈ドイツ風ワルツ〉という民衆のワルツ

と対応しています。大きな構想の中に貴族的なものや民衆のものが対をなして置かれています。続いて〈オイゼビウス〉と〈フロレスタン〉というシューマンの中にある二面性を表す人たちも出てきます。この〈フロレスタン〉という動的なキャラクターの曲の中には、前述の《パピヨン》のフレーズが出てきます。

そして〈コケット〉〈返事〉が続いたのち、〈蝶々(パピヨン)〉との間に、〈スフィンクス〉が挟まれます。この〈スフィンクス〉というのは、3つの音列で、書かれてはいるけれど演奏されないというもの。《謝肉祭》の核となる音ですが、音は出されないのです。シューマンの《幻想曲》という作品の冒頭に、モットーが掲げられていますが、その内容は「全ての音を貫いて、一つの音が耳を傾ける人だけに響く」というもの。聴こうとする人にだけ聴くことができるというシューマンのロマンを感じます。「スフィンクス」という言葉はドイツ語では蛾という意味もあるそうです。ドイツ文学における蝶／蛾が何を象徴しているのか。例えば蝶には軽やかさや自由、寄る辺なさ、変容、サナギから蝶にかえていくというようなこと、もしくは魂や夢などとも言われているそうです。〈スフィンクス〉や〈蝶々〉というのは、シューマンのファンタジーのもとになるものでもあるかもしれません。

Sphinxes.



〈スフィンクス〉の3つの音列
楽譜に書かれているが演奏されない。



「パンタロン」

金持ちで欲深く、性欲旺盛な老人として描かれる。悪巧みをするが召使いに台無しにされるというのがお決まりのパターン。



「コロビーヌ」

アルルカンの恋人の召使い。魅力的な女性で、無学だが周囲を操る知恵を持つ。パンタロンにしつこく言い寄られるがうまくかわす。

続く〈A.S.C.H.-S.C.H.A ~踊る文字〉では、〈スフィンクス〉の4つの音が踊り出します。のちに妻となるクララを模した〈キアリーナ〉も、〈スフィンクス〉の謎解きの音から始まっています。その後には〈ショパン〉が置かれ、シューマンが当時付き合っていたエルネスティーネという女性を表す〈エストレラ〉、そしてみんなが再びめぐり会う〈再会〉、コメディア・デラルテの主要キャラクターである〈パンタロンとコロビーヌ〉と並びます。〈ドイツ風ワルツ〉の間奏曲には〈パガニーニ〉も出てきて、告白を試みる内気な人が登場する〈告白〉、散歩して歩き出す〈プロムナード〉と続いていきます。さまざまな寸劇が続く謝肉祭という世界の中で、あらゆるキャラクターの人が次から次へと出てきて、この謎めいた4つの音をもとに語り出すのです。

そして〈休息〉の後、最後は〈ペリシテ人と闘うダヴィッド同盟の行進〉となります。「ペリ

シテ人」というのは芸術や文学に興味のない無趣味な人たちのこと。「ダヴィッド同盟」というのはシューマンが考え出した架空の団体です。オイゼビウスとフロレスタンが入っていて、古い考えを持った人たちを打ち破ろうという人たちの同盟です。彼らは最後に、古い考えや芸術や文学に興味のない人たちを打ち破ろうと行進していきます。

この曲集の中にも、やはり神(天)は出てきません。そしてここでも、主語は「私」ではなく、さまざまな見方、考え方があり、それらがまとまって一つの大きな世界を作るといふ、その様が描かれています。それは社会の多様さそのものでもあり、また一人の人間の中にも存在する多様さをも描いているように感じられます。その多様な社会、そして人間に対するシューマンの愛の眼差し、信じる眼差しが私には感じられます。夢を見る人、人間への讃歌であるのが、シューマンの《謝肉祭》だと思います。

イラストはコメディア・デラルテのキャラクター。いずれもM. Sand (ジョルジュ・サンドの息子)による。彼の著作 "Masques et bouffons" (1860) に掲載されたもの。

対談 劇場の世界 ヒューマニズムと人間への希望

The Ikuyo Nakamichi Road to 2027

仲道郁代×糸川麻里生 [ドイツ文学者]

構成：柴田克彦

ベートーヴェンとシューマンの劇場的な一面を捉えた今回のプログラム。劇や劇場が人々にどのような役割を持っていたのか、ドイツ文学者で慶應義塾大学教授の糸川麻里生氏をむかえて語り合った。

「謝肉祭」の意味

仲道 今回のプログラムの最後にシューマンの《謝肉祭 (Carnaval)》を置いたのですが、謝肉祭自体がとてもヨーロッパ的で、日本にはないものです。これは一体何なのか。その辺りから伺わせていただけますか。

糸川 「劇場の世界」というテーマのコンサートに《謝肉祭》が入ってくるのは、研究者として大変興味深い点です。なぜなら謝肉祭は、ヨーロッパの演劇にとって非常に重要な意味を持っているからです。古代ギリシャやローマにおいて演劇は世の中の中心でした。紀元前6世紀にギリシャ人が文字を使うようになる前は、物語すなわちお芝居で価値観を共有していました。

その後キリスト教がいちばん厳しかった10世紀～12世紀ぐらいの時代になると、その教義だけが正しいとの考えから、演劇を抑圧するようになりますが、しかしそうした中でも民衆の間に古代から伝わる喜劇の伝統は残っていました。お祭りなどでちょっとふざけたお芝居をやることができましたし、謝肉祭＝カーニバルもそうです。カーニバルというのは、小さなグループで物語を演じながら進んでいく仮装行列ですよ。古代から続いてきたおふざけ劇が発展したものです。表現していることと駄目なことがある中で、民衆がいろいろな意味を込めながらカーニバルを続けていた。その伝統をシューマンやベートーヴェンも、かなり意識していたのではないかと思います。



18世紀のヴェニスのカーニバル。仮面をつけた人やメヌエットを踊る人の姿が描かれる。
G. D. Tiepolo "Carnival Scene" (1754-55)

仲道 シューマンの《謝肉祭》を見ていて面白いのは、物語ではないこと。主人公がいて曲が進むのではなく、いろいろな登場人物が現れては消えて、最後に皆が正義に向かって進むという形になっています。その中に、外の社会の人が示す多様性と、動的な自分と夢見がちな自分というシューマン自身の多様性が入り交じっているのが興味深い。しかも、なぜ最初はピエロなのか？ 次になぜアルルカンが出てくるのか？ などと考えていくと、若き日のシューマンの心意気が見えてくるような気がします。

糸川 ピエロやアルルカンといったキャラクターも、主にイタリアの民衆カーニバルの中で長く残ってきたものです。おっしゃる通り、大事なのはストーリーよりもキャラクター。仮装行列はどんどん流れていくのですけれども、その中で、キャラクターがちらちらと見えながら、進んでいくんですね。そのキャラクターたちがそれぞれ何かをお客さんに感じさせていく。そういった表現なのだと思います。

シューマンと蝶々

仲道 シューマンはこの曲の前に《パピヨン》を書いています。まさしく〈蝶々 (パピヨン)〉というタイトルの曲も《謝肉祭》に入っていますし、《パピヨン》の中にあるメロディを《謝肉祭》で使ってもいます。この2曲は非常に関係が深い。初期のシューマンは蝶々、パピヨンというものをどのように見ていたのだろう？ と思います。

糸川 ドイツ文学研究者の観点から見ると、シューマンが、パピヨンすなわち蝶というモチーフを使ったり、夢見がちな人、批判的な人、風刺や冗談が上手い人といったキャラクターを使ったりするのは、小説家ジャン・パウルの影響が大きいと思います。彼は19世紀の前半にはゲーテと並び称されるスター作家でした。

その作品の中で、シューマンに最も影響を与えた作品が『生意気盛り』でした。これは、あ

る老人が莫大な遺産をヴァルトという若者に与えるお話。ただし、夢見がちなヴァルトがもつと世間のことを学んでバランスの取れた人間になったときに、遺産を相続させるという条件があります。

ヴァルトが成長していく過程でなぜか双子の弟ヴルトがやってきます。弟は、ヴァルトとは対照的に現実的な性格で、批判的な意見や冗談を言ったり、風刺したりするセンスを持った人。実はヴァルトもヴルトも、ドイツ語とギリシャ語で「神の意のままに」を意味する名前です。同じ意味の名前を持ちながらキャラクターが全然違う双子が、同じポーランドの娘ヴィーナを好きになるなど、さまざまな経験をしていく。つまりドイツ伝統の成長物語です。

ジャン・パウルは、夢見がちなヴァルトと、ちょっとこまっしゃくれたヴルトの物語を書き、彼らに様々な経験をさせることで、自分の夢見がちな部分と、批判的あるいは風刺が好き部分とを組み合わせながら表現しているのではないかとされています。

シューマンの音楽に、夢の世界に広がっていくような部分と、風刺や批判的な部分が存在するのは、まさにジャン・パウルの小説を音楽化した面があるのではないかと思います。

仲道 ジャン・パウルの中に流れている夢見がちな部分と現実的な部分が、若き日のシューマンの心意気と合致したわけですね。

さらに面白いのは、《謝肉祭》の中に、音が書かれていながら弾かない〈スフィンクス〉という非常にユニークな曲があること。これは「語らないけれど何かが存在していることを大切に」という意味かもしれません。そしてこの「スフィンクス」は、ドイツ語で「蛾」の意味もあるとか？

糸川 鳥や蛾、あるいは蝶のような生き物を表す場合がありますね。

仲道 すると、スフィンクスやパピヨンが何を象徴していたのか、とても興味が湧きます。お

そらくそれが、シューマンの夢であり、想像をたきつける一つのヒントになったのだろうと。

象川 まさに『生意気盛り』の中にも、しばしば蝶、あるいは鳥も含めた、ふわふわ飛んでいく生き物を表す言葉が出てきますし、主人公のヴァルトが「自分は蝶のような存在である」と語っています。また、自分が成長するためには、メタモルフォーゼして、サナギや蝶にならなければいけないといった表現が何回も出てきます。

さらに『生意気盛り』の中には、仮面舞踏会の他にも仮装のモチーフがしばしば出てきます。そこには、姿を変えることで、むしろ本当のことを表そうとする意図もあるのかもしれない。

社会情勢と「傷」

象川 シューマンに影響を与えた2大作家といえば、ジャン・パウルとE.T.A.ホフマンですが、2人とも音楽評論のプロでもあって、言葉と音楽の違いを非常に意識していました。嘘をついたり何かを否定できたりするのが、言葉という表現手段の特徴であるといわれますが、逆にいえばそれは限界でもある。そこで彼らは、音楽的な書き方をしようとした。例えばE.T.A.ホフマン——「E.T.A.」の「A.」はアマデウス。つまりモーツァルトの名前です——は、モーツァルトの特に転調が好きで、転調した瞬間に違う世界へ移れると考え、そこに大変な憧れがあったようです。

同じくジャン・パウルも音楽的に散文を作ろうとした。まるでモーツァルトの転調のように、いつの間にか違う世界に入るような文章、それはロマン派の文学者たちの一つの挑戦でもありました。

仲道 それはすなわちシューマンにとっても挑戦ですね。ベートーヴェンのように音やモチーフを論理的に積み重ねて断言するのではない世界への憧れがある。その中に真実を見出したいとの思いもあるし、音が消えゆくところ、音がないところに意味を込めるなど、これらの

作品には、若き日のシューマンの、文学的な素養をもとに新しい世界を作りたいという意気込みが感じられます。

シューマンの両曲には、意識する現実世界と夢の中でしか見ることができない美しい世界が入り混じっていて、違う世界に連れていかれてしまうような感じがします。でもそれが本当に美しい。そこが私が惹かれてやまないシューマンの魅力でもあります。

象川 ゲーテやシラーであれば、どんなにファンタジーの世界に行っても、必ず片足は現実の方に帰ってくる。おそらくベートーヴェンもそうだったのではないのでしょうか。しかし先の2人のようなロマン派の詩人たちは、あちら側の世界に詩の力で行ってしまいたいという衝動の方が強い人たちだったといわれます。

ゲーテやシラーは、フランス革命などを同時代に直接体験した人たちです。でもロマン派の時代には、もうドイツの社会はイギリスやフランスのような新しい時代には入っていけそうにないとの思いがかなり強くなってきていた。それでも、やはり新しい時代、新しい世界を求めたいという気持ちはある。そこで自分たちなりの新しい世界を、想像力や主観を駆使して成し遂げようと考えた。

仲道 するとシューマンの内面性も、ドイツの社会情勢とリンクしているわけですね。現代もそうですが、心折れることがたくさんある中で、やはり夢を見たい、美しい世界、理想の世界へ向かいたいとの思いがある。それとシューマンの作品を重ねることができるような気がします。

象川 一方で、戦争や政治的な混乱も続いていて、思想や価値観の持ち方が分からない時代でもありましたので、とにかく何かを表していこう、とにかく未知の世界へ行くのだ！といった面もあったと思います。これを文学で見ると、ハイネが「詩人は世界の傷だ」と言っています。芸術が美しいものを表現するというだけでは済まない時代であるとすれば、芸術家の中に傷が

口を開ける、といった考え方をハイネはしている。多分シューマンにもそういう考えがあったのではないのでしょうか。

仲道 シューマンの作品を弾くと泣けるんです。それはなぜか？ あまりにも美しいものを求めながら叶わないからかと思っていましたが、それが傷という部分なのですね。傷を自覚すること、心の痛み。傷を自覚しながら、それでも自分が表現していこうとする決意がある……そこが泣けるところなのかなと、いまお話を伺って思いました。

劇場的なベートーヴェンのソナタ第18番

仲道 このソナタは、一つ一つの楽章がお芝居のシーンを見せているかのようです。私は曲を弾くときには、作品の主観をいろいろな立ち位置で見ていくのですが、そこで音を出す自分は一体何者なのか？ という問題が起きてきます。お芝居でも、主役や脇役などいろいろな人の主観がありながら、では見ている人の主観はどこにあるのか？ という問題が生じますよね。そういった様々な要素をこれらの曲から感じたとき

に見えてくる世界があるのではないか……というのが、今回の「劇場の世界」なんです。

象川 よく分かるような気がします。法律や宗教でまとめる世界というのは、上から創っていく、一神教の教義がある世界なわけですが、でも結局17世紀には中央ヨーロッパ中が大戦争になってしまった。その時いかなる宗教をもってしても戦争をやめることができなかった。

そんな時は、もう下から作っていかなくてはならない。紀元前のギリシャやローマは、意見が完全に一致しなくても、「あのお芝居、あの物語、あの歌を知っている」ことで、世の中をまとめていった。それがヒューマニズムだと思うんです。

その意味では、劇こそが、人間を見いだす場所でもあったのです。だからヨーロッパの人たちは、どんな時にもどんな田舎町にも劇場を作り、そこには劇団もちゃんとあって、大事にしてきたのだと思います。

仲道 今回のシューマンの2曲にも、神は出てこない。ベートーヴェンの第18番も、そこに生きる人たちの「なんだろう？」は神に問うているものではなく、神が答えるわけでもない。まさに、ヒューマニズムの世界ですね。



糸川 そうだと思います。カーニバルにも、神は普通は出てきませんからね。出てくるのは、ピエロとか、貧乏人とか、居候とか、歯が痛い人とか……。それが仮装行列になればカーニバルで、広場でやれば笑劇、コメディア・デラルテになるわけです。そして笑劇の最後の言葉が「皆さん、ここで喜劇は終わりです。どうぞ拍手を」。つまり「諸君、喜劇は終わった。喝采したまえ」。

仲道 ベートーヴェンが最後に言ったといわれる言葉ということですね。

ソナタ第19番、 第20番の不思議

仲道 今回最初に演奏する第19番、第20番ですが、曲をよく見てみますと、同じ「ソ」の音が主音のト短調とト長調で、楽章構成を入れ替えると、この2つのソナタで1曲という形が成り立つんです。すると一つの物語というか、形になる。今回は、「劇場の世界」というコンセプトのもと、第19番と第20番を混ぜた形で演奏してみたいと思っています。

糸川 それは、当時のドイツの状況と照らし合わせても、非常に面白い試みだと思います。なぜなら、この時代にドイツの出版業が本格的に始まったといわれていて、当時の文学には出版社や編集者との関係を描いている作品が非常に多いのですが、例えばE.T.A.ホフマンの『牡猫ムルの人生観』という音楽家クライスラーの自叙伝では、天才猫ムルが書いた文章とクライスラーが書いた文章が混じっていたりと、そんなことが結構行われているのです。

糸川 麻里生 [くめかわ・まりお]

慶應義塾大学文学部教授。1962年栃木県生まれ。専門は、近現代ドイツ文学、学問史、文化史、スポーツ史。『ワールドボクシング』記者、上智大学専任講師を経て、慶應義塾大学文学部教授、同大学アート・センター副所長。雑誌『三田文学』元編集長。「ゲーテ自然科学の集い」代表、公益財団法人ドイツ語学文学振興会理事。

仲道 つまり、今回のこの試みも許していただける……。

糸川 すごく謂れのあることなのではないでしょうか。

仲道 では、このドイツの文学世界にて原稿が入り交じる感じを、今回は体現させていただくという意味でも、この第19番と第20番を混ぜた形で演奏してみたいと思います。

2023年のいま、この曲を弾く意味

仲道 ベートーヴェンの第18番のソナタは、自分を斜め上から見ていながら、前向きです。「どうしようもない」ではなく、「そうなのだ。しかし進んでいこう」という明るさを、私はこの曲の中に感じます。言い換えれば、生きる力やたくましさですね。シューマンの中にも、やはりクリティカルな視線はあって歪んだものも出てくるわけですが、でも最後は、皆で俗的なものを打ち破って、行進していこうとする。ゆえに、夢を見るということは、苦しみ、痛み、悲しみもしっかり見据え、でもその上でちゃんと進んでいこうという思いを語ることはないか、今回の演目はそういった作品たちではないかと思っています。

今回のプログラムを考えたのは2017年頃なので、2023年の今の状況は分かっています。しかし、コロナと共に生きていこう、戦争があっても生きていかなければならないという時に、今回のプログラムは、作品から力をもらえますし、人間を信じて進んでいこうといった気持ちにさせてくれる。そこに、いまこれらの曲を弾く意味があると思っています。

2023年 [秋のシリーズ] ブラームスの想念



曲目
 ブラームス：7つの幻想曲 Op. 116
 ブラームス：3つの間奏曲 Op. 117
 ブラームス：6つの小品 Op. 118
 ブラームス：4つの小品 Op. 119

2024年 [春のシリーズ] 夢は何処へ

曲目
 ベートーヴェン：
 ピアノ・ソナタ第27番 Op. 90
 ベートーヴェン：
 ピアノ・ソナタ第13番 Op. 27-1
 ベートーヴェン：
 ピアノ・ソナタ第14番「月光」Op. 27-2
 シューベルト：
 ピアノ・ソナタ第18番「幻想」D894 Op. 78

2023年9月16日(土)
 サントミュージゼ 小ホール
 問合せ：上田市交流文化芸術センター 0268-27-2000

2023年9月17日(日)
 長岡リリックホール
 コンサートホール
 問合せ：長岡市芸術文化振興財団 0258-29-7715

2023年10月15日(日)
 アクトシティ浜松 中ホール
 問合せ：浜松市文化振興財団 053-451-1114

2023年10月22日(日)
 東京文化会館 小ホール
 問合せ：ジャパン・アーツ ぴあ 0570-00-1212

2024年5月11日(土)
 アクトシティ浜松 中ホール

2024年5月19日(日)
 兵庫県立芸術文化センター
 KOBELCO 大ホール

2024年6月2日(日)
 サントリーホール

仲道郁代 The Road to 2027

リサイタル・シリーズ

全プログラム



春のシリーズ
秋のシリーズ

パッションと理性

モーツァルト：
ピアノ・ソナタ K.310
ベートーヴェン：
ピアノ・ソナタ第23番
「熱情」 Op.57
ブラームス：
ピアノ・ソナタ第3番 Op.5

2018

ショパン
～プレイエル響き～
ショパン：
バラード第1番 Op.23、
バラード第2番 Op.38、
バラード第3番 Op.47、
バラード第4番 Op.52、
24の前奏曲 Op.28

2023

本公演

劇場の世界

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ
第19番 Op.49-1、第20番
Op.49-2、第18番 Op.31-3
シューマン：パピヨン Op.2、
謝肉祭 Op.9

次回
公演

ブラームスの想念

ブラームス：7つの幻想曲 Op.116、
3つの間奏曲 Op.117、6つの小品
Op.118、4つの小品 Op.119

悲哀の力

ベートーヴェン：
ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」
Op.13
ブラームス：8つのピアノ小品
Op.76
シューベルト：ピアノ・ソナタ
第19番 D958

2019

シューマンの夢

シューマン：
アレグロ Op.8、幻想小曲集
Op.12、予言の鳥 Op.82-7、
ピアノ・ソナタ第1番 Op.11

2024

シューベルトの 心の花

シューベルト：
4つの即興曲 D899
Op.90、
4つの即興曲 D935
Op.142

音楽における 十字架

ベートーヴェン：
ピアノ・ソナタ第22番 Op.54、第21番
「ワルトシュタイン」 Op.53
ショパン：2つのノクターン Op.48
シューマン：
ピアノ・ソナタ第3番 Op.14
2028年3月に延期（会場未定）

2020

ドビュッシーの 見たもの

ドビュッシー：前奏曲集 第1巻、映
像 第1集、映像 第2集、喜びの島



「The Road to 2027」からの
初のライブ・レコーディング

2025

ラヴェルの狂気

ラヴェル：鏡、水の戯れ、
夜のガスパール

高雅な踊り

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ
第24番「テレゼ」 Op.78、
第25番 Op.79、第26番「告别」 Op.81a
リスト：「村の居酒屋での踊り」 S.514
ラヴェル：優雅で感傷的なワルツ
ショパン：ワルツ「告别」
Op.69-1、ワルツ Op.64-2、
ポロネーズ第6番「英雄」 Op.53

幻想曲の系譜

～心が求めてやまぬもの～
モーツァルト：幻想曲 K.475
シューマン：幻想曲 Op.17
ベートーヴェン：
ピアノ・ソナタ第28番 Op.101
シューベルト：さすらい人幻想曲
D760 Op.15

2021

幻想曲の模様

～心のかげらの万華鏡～
ブラームス：2つのラプソディ
Op.79より第1番
シューマン：クライスレリアーナ Op.16
ショパン：幻想曲 Op.49
スクリャーピン：12のエチュード
Op.8より第1番、第12番、
幻想曲 Op.28

令和3年度
文化庁芸術祭
「大賞」
受賞

2026

組曲～調和と心慮～

グリーグ：組曲「ホルベアの時代より」
Op.40
バッハ：パルティータ第1番
BWV825、第2番 BWV826、
イタリア協奏曲 BWV971
ラヴェル：クーブランの墓

知の泉

ベートーヴェン：
ピアノ・ソナタ第17番「テンペスト」
Op.31-2
ショパン：バラード第1番 Op.23
リスト：ダンテを読んで S.161-7
ムソルグスキー：
組曲「展覧会の絵」

2022

前奏曲～永遠への兆し～

ドビュッシー：前奏曲集 第2巻
ラフマニノフ：前奏曲集 Op.23より、
第2番・第5番・第7番
前奏曲集 Op.32より、第2番・第5番・
第8番・第10番・第11番・第12番
前奏曲「鐘」 Op.3-2

2027

変奏曲

～生の命題を編む～

モーツァルト：きらきら星変奏曲 K.265
シューマン：アベック変奏曲 Op.1
ラフマニノフ：
コレリリの主題による
変奏曲 Op.42
ベートーヴェン：創作主題による
32の変奏曲 WoO.80
ブラームス：
ヘンデルの主題による
変奏曲とフーガ Op.24

仲道郁代 Official YouTube Channel

仲道郁代の各種動画を配信しています。ぜひご覧ください。



「劇場の世界」関連動画

仲道郁代 プログラムを語る
【劇場の世界】



仲道郁代 × 桑川麻里生【劇場の世界】
～ベートーヴェンとシューマンが描いた人間への希望～



The Road to 2027 の関連動画

2020年 秋のシリーズ
「ドビュッシーの見たもの」



2022年 春のシリーズ
「知の泉」(アナリーゼ)



2021年 春のシリーズ
「幻想曲の系譜～心が求めてやまぬもの」



2022年 春のシリーズ
「知の泉」ムソルグスキー《展覧会の絵》より《キエフの大きな門》



2021年 秋のシリーズ
「幻想曲の模様～心のかげらの万華鏡」(対談)



2022年 秋のシリーズ
「前奏曲～永遠への兆し」(鼎談)



CFX

Yamaha Concert Grand Piano

私と、響き合う。

旬のピアニスト情報が満載
Pianist Lounge. <https://jp.yamaha.com/sp/pianist-lounge/>

株式会社ヤマハミュージックジャパン

仲道郁代の名盤 @RCA RED SEAL

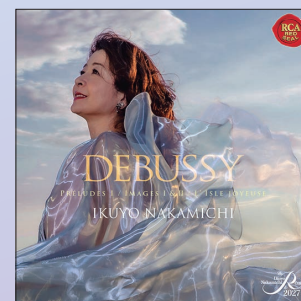
Sony Music Japan International



● は公演曲収録アルバム

ドビュッシーが心に投影した理想の響きがここに。

仲道郁代が辿る、深遠かつ多様なベートーヴェンの音世界。



最新録音
ドビュッシーの見たもの
前奏曲集I・映像I/II・
喜びの島
¥3,300(税込)
ハイブリッドディスク
● SICC 19053



17枚組 | 完全生産限定
仲道郁代
ベートーヴェン集成
～ピアノ・ソナタ
&協奏曲全集 ●
¥19,800(税込)
12CD+3ハイブリッドディスク
+2DVD
● SICC 39032~48

仲道の「音楽の故郷」、シューマンへの帰還。



シューマン:
ファンタジー
¥3,300(税込)
ハイブリッドディスク
● SICC 19008



ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ全集6
第16番・第17番「テンペスト」、第18番 ●
¥2,640(税込) CD ● BVCC 34104



ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ全集10
第29番「ハンマークラヴィア」、第19番&第20番 ●
¥2,640(税込) CD ● BVCC 34107



シューマン:謝肉祭 ●
¥2,136(税込) CD ● BVCC 1089



優れた製品は、常に最高のパフォーマンスを奏でる。

ユニオンツールはオフィシャルスポンサーとして、音楽活動を全面的に応援しています。

「優れた製品を供給し社会に貢献する」

ユニオンツールは、このフィロソフィーを昭和35年の創業から守り続けています。

人と技術と地球を結ぶ



ユニオン ツール株式会社


<http://www.uniontool.co.jp>

The Road to 2027

仲道郁代ピアノ・リサイタル「劇場の世界」

2023年6月3日(土) 開演 14:00 サントリーホール

主催：ジャパン・アーツ

特別協賛：  ユニオン ツール株式会社

協力：ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル/ヤマハミュージックジャパン

発行：有限会社オフィス・ナカミチ

デザイン：三木和彦/株式会社アンバサンドワークス

編集：北川由子/有限会社オフィス・ナカミチ

表紙写真：ヒダキトモコ

制作：ジャパン・アーツ